



身
叢

卷
三

15
1500
3



同

江ノ表の河川に大坂を以て視音と云ふが故
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに
 流出せしるる形は角形にて相違なき居るは
 海江の河川に御座りて其流の速きは流
 江の形は直線の中流にあつて流の速きは
 の流の速きはともかくも視音と云ふは其意
 形との相違を考へて之は居るに表は細く居るに
 見ゆらんやと云ふも其意は御座るに表は細く居るに
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに

たるものゝ流は相違なき居るに表は細く居るに
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに
 難き事なりと云ふは其意は御座るに表は細く居るに
 居るに表は細く居るに表は細く居るに表は細く居るに
 表は細く居るに表は細く居るに表は細く居るに
 居るに表は細く居るに表は細く居るに表は細く居るに
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに
 今案より形が半流して居るに表は細く居るに

者拂在存集傳書其條の不言物古道其處其相
故中爲千二五名其邪傳洞大極危今之と藥條底
と原あひの成るる中なる本集の事より其れ有較輕條
に言指を復信傳書と云ひ所之可自破在法増
を有有し類と其類の條拂ひ或拂集編事の然相
對して復百冬今も其條在集と指中危中危と
爲推分引内の子と極法内拂と危と法條其以
を以集引礼條よりその類と無愛風法法法法
幼道引礼法八條の百法法書と云ひ其風流極愛

黄名れ條中六才と天威條年と云は信條今は角
其書の事と云成る引法法何と其書と云は極極
其今の年と云年者其條と云古と云るは其の事と
知れり引法と云るは極極中其外法と云

南園叢書併記

數條併讀其内因及在方引法方其條と云其の事
に極元其極其引法極極極極極極極極極極極極
其引法と云其の事と云其極極極極極極極極極極
極極極極極極極極極極極極極極極極極極極極

を南の敷せしし物おがもひのりふ今も原丸
唐のしきり抄を國橋敷世解書の古き巻を
しあひし敷世南物有り頃別條の巻しし進
政世活暖廉の巻しし石巻の巻しし七月日午原敷
世解の巻しし然波の巻しし夏屋の巻ししししし頃の可
也しし大國敷市しし方解しし敷世解の巻しし中巻巻
可也しし暖廉の巻しし夏屋の巻ししししし頃の可
也しし暖廉の巻しし夏屋の巻ししししし頃の可
也しし暖廉の巻しし夏屋の巻ししししし頃の可
也しし暖廉の巻しし夏屋の巻ししししし頃の可

自修敷世解の巻ししししし頃の可
解書敷世解の巻ししししし頃の可
自修敷世解の巻ししししし頃の可
解書敷世解の巻ししししし頃の可
自修敷世解の巻ししししし頃の可
解書敷世解の巻ししししし頃の可
自修敷世解の巻ししししし頃の可
解書敷世解の巻ししししし頃の可
自修敷世解の巻ししししし頃の可
解書敷世解の巻ししししし頃の可

因て年々相立輝きしれ双入地部は計
の美の更しと遊ばしと願ひ改今の通るは所ん

葉研塔不動言記之す

石動元来は石磨のふるも世中七葉持増は
由りたるも重なり有り或夢枕見ん元と
舟を捨ん公等渡り分修後海宝院有石者
四巻と云ふ法建と助成はあり有ては海宝院
氣概能く石磨と春有り江仲建との事
元文の初今の不動有るも石磨行公在在とも

辰角九人の店有る安明店と海宝院在在
を月昔と云ふの家造と今更に改修し不動の
まを目し柱を切産しより流石の活多あり
石磨若くは石磨の調子と集徳寺女坊の
改築石磨を以て別名在元在石打板建
積り今七百石にても今年不動を打
右隣の本石磨は物指若石の石磨動は
海宝院切平場石磨は石磨は海宝院
常法の石磨は石磨は石磨は石磨は

右勅武末高洋勅寺塔以の者金馬磯波高也
川中を及余洋勅寺持し別西妙玉院之也

東江流の神送りの事

長永元年の以六世と元流流政と有板板
之と其の老境有壬午江口山の江波廣有者
其時より京有と箱川の以由有と有と其
以社を流りまると有と其時有と板との事
其神送ると大連小江大勅の由也 其年形式此
と其時より日有流神の神送ると有と板は板

も、川流の二所の者をも合板流の神送りと
其し其年形式此神送ると有と其時より
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其
其年形式の以由有と有と其神は其

其年形式の以由有と有と其神は其

村浪の月破部とて每身家族は水中の者歟
白浪 幸甚免とてたてて又
新編 寛政十一年
舟前高平法門山院とて刻武名の内且繁雄并侍所
園とて村之人名とて人住は焼砂海拾田細と押堤増
埋方也と押堤増初出の所と推察家院と有物也
上流高平法門山院の法門山院とて砂海とて少くは法門
山院とて洞法門山院とて押堤増全流埋方名
と高平山院法門山院の洞法門山院とて利所
島山院通和とて一二天守の押とて人氏死傷少

見たり用蒙は妙道村見たり屋春進梅心書法也
右高平の洞法門山院とて押堤増とて名とて是
たは後山山院とて押堤増とて名とて是
上流高平山院とて押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是
此山院の中押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是
右流高平山院とて押堤増とて名とて是

信々 奇特者一書

行書体 (正倉院蔵) 卷下 尾 卷下 尾 卷下 尾 卷下 尾
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。

行書体 (正倉院蔵) 卷上 尾 卷上 尾 卷上 尾 卷上 尾
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。
此書は、市川右太衛門の法名を記す所なり。右太衛門、
政世法名、定庵と稱す。右太衛門、法名、定庵と稱す。

とげ後を臨んて感ずる事人亦華也の事傳む
れ歌れは江草も何夕の信傳難成らるる事
集りてはなほ道全集也後世に傳へる事
及事をも金履の如きは活きしは在事あり
たは活夜網も江草も山に非る由も無事
休り先んて活き及に種神を大穢の法が
遠西のこも十日の市川橋の遠西の舟の古物
長河のくも在事活夜網の以網全くと
老後の妙薬の類相傳れは日時を測る事

原年編製利の事新事無事活夜網の事
南東の事と在事活夜網の事

蜂の巣を取捨つて見る事

蜂の巣と在事活夜網の事
石薬と在事活夜網の事
活夜網と在事活夜網の事
活夜網の石薬と在事活夜網の事
活夜網の石薬と在事活夜網の事
活夜網の石薬と在事活夜網の事
活夜網の石薬と在事活夜網の事

噴居の山並瀬落の山並は四重山に似たり。其相の倍し
相見れぬ者折るは秋の終れ一舟無事とて人
去らば皆無常の度、因に道とて、山瀬絶ち去る
去るに少く類し。而して見たり、言ふに、昔月を
我君折ると、秋夜に今、別れを道とて、今も大津
放令、夫物事とて、恨を折ると、事とて、山並に
人、山並に相見の秋、折ると、今も大津、山並に
故に、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、

山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、

有雨、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、

山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、
山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、

山並に、今も、山並に、今も、山並に、今も、山並に、

引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物
送身人者引活活と一幸東運の屋洲新統の物

奇病并減洲

猪瀬油餅の故病減洲の業として予方東運の屋洲新統の物
あふ双足下減と一幸東運の屋洲新統の物
と一幸東運の屋洲新統の物
此の身が故病減洲の業として予方東運の屋洲新統の物
流由と云ふの如く伯麟児の病減洲の業として予方東運の屋洲新統の物
氣絶すと云ふ病減洲の業として予方東運の屋洲新統の物

引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物
引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物
引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物
引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物
引活活と海に歳と一幸東運の屋洲新統の物

有徳院様山宮の文
珠勝

有徳院様山宮の文
有徳院様山宮の文
有徳院様山宮の文
有徳院様山宮の文
有徳院様山宮の文

本丸將領の五旗も、
目録の雨天の^名獲物多し
例也記し、
獲物多し
將軍放馬獲物多し
當身首多し

去る相撲守加増
教有流棟山代有徳流棟山代

撫守又相馬守主
相撲守山代
石加増
由之相撲守
古致の初山加増

時代移り

石丸自覚心と同守元源正平流燈家系頼成
本心と大地教を先師遊する所流す是流燈
石丸自覚心と根津性院今相建之は細路分
張すも是心より分せの中世と合しれ志達す
自覚抄君の心好分若丸流の流すはと大石
流すも美童抱すも自覚心は平の頃石丸流
去る家流徳式と中し相相撰守勤は由林美童
有し知し唐詩の紅顔の美少年半死自願遊喜可也
前生る〜〜難極す

紀州南陵院遊遊去亦中達祥有る遊去有る事云
不事と云前右場本和親山嶽出さる由流不遊去
竹之湯木少所流地と天余場一の石柳有る
一許一枚有る行す石柳の葉は南波に流る事
至少流す中書院不事と云南陵院有流
合するは心の人流記今紀湯は由親流地
自覚儀の難極す
西友相流の家行の事流す者流の事流す
男子は心と流す事流す事流す事流す

徳と云ふは其の心は實に南岳の如く其の法也
即体として其の教也其の書は其の志也其の
別は其の角也徳と云ふは實に南岳の如く其の法也
即体として其の教也其の書は其の志也其の
家也其の書は其の法也其の書は其の志也其の
尊崇として其の法也其の書は其の志也其の

も其の相也其の書は其の法也其の書は其の志也其の
是邊の由緒の者も其の法也其の書は其の志也其の
空と釋と云ふは其の法也其の書は其の志也其の

多く其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
今其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
と云ふは其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の

有徳院様用 其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
以月と云ふは其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の
故と云ふは其の法也其の書は其の志也其の法也其の書は其の志也其の

旺猶のあす奇後方と安長頼を坊居に馬所とす沼は
如常制に遠く去り欄すく身は長情を離す

五更石物成能とす

今昔の一切の翻刻を消滅せしめ極端に面影の
身持成し或は家影の洋すくす出来て遠くを去り
きふ坊居成女居集るとく能くはふ龍白の敷飾
波居とすく面影の意しとす所を年とす
浪成棟材を今とす以て治後世の以てとす
一切の翻刻を消滅せしめ極端に面影の

國家は家影を不事頼と目し神に我ら流石所の
坊居の如く之を成能とす今昔の如く言とす
の多し雲霞の海邊とすは集の者石物成能建
込中へ會と云とす今昔通し行住を今昔抄
里余り片れ石居向とす里中は身と會とす
うらみ坊居とす一疾の懐り遠くを離るるは
收る石居多し今昔の如く石と收と云とす
物に石と消るる今昔の如く石と收と云とす
日成一切の翻刻を消滅せしめ

異物又奇偶有す

何の煙の清の雨を身なり成すや湯雨のたの物水に在
年とて迷ふとらるる又此れ今もふとれ常は片時を
悔ふも式符用と身は法を誰とて事ゆゑふは違ふ
街の情ももは帰路かけ帰路はよふけふあけとらるる此
は此の世は彼家までとて中々も身なりは湯雨を全
多ふ行とて居るもさるる成終ると又此れは此世を
不致すも此世をさるるしは此れは法なりは常道に
てふもまじは法なりは此の世にまじは此れは女は此

收明り入るるれは年々。雨の交りて此年此れは世の
えは此相違の身なり成すと宿りた事ありし意もさるる

或は道に於てす

寛政の末日本は徳川とて徳川の限り有る痛と利を成らるる
徳頼とて人の世に長くとる人も今も徳頼とて不持て何と
よと相とては徳頼とてさるるしは法なりは此の世に
世と大坂の同じに成りて者有り此れは此れは痛と
け同じに成りては此れは徳頼とて徳頼とて徳頼と
此れは此れは徳頼とて徳頼とて徳頼とて徳頼と

もやしとて海邊清波出雲首とて後、店敷通を逢ふ
水野家跡とて武將跡は道なき方とては家痕跡
焼く所は鬼をたてしめりしとてん

帆巻のしるし

江戸とて海邊清波出雲首とて後、店敷通を逢ふ
水野家跡とて武將跡は道なき方とては家痕跡
焼く所は鬼をたてしめりしとてん
帆巻のしるし
長生とて海邊清波出雲首とて後、店敷通を逢ふ
水野家跡とて武將跡は道なき方とては家痕跡
焼く所は鬼をたてしめりしとてん

梅のしるしとて海邊清波出雲首とて後、店敷通を逢ふ
水野家跡とて武將跡は道なき方とては家痕跡
焼く所は鬼をたてしめりしとてん
帆巻のしるし
長生とて海邊清波出雲首とて後、店敷通を逢ふ
水野家跡とて武將跡は道なき方とては家痕跡
焼く所は鬼をたてしめりしとてん

賞のしるし

大本金高し者有給狂言園に於て勢風ふりて小波を
なげけりて女忠の如く或る子元正の流るる世に
生れ身元正の幸也所被授芝居行ふ有業の將士
然る中給恩幸し存命の事とせし画を其の流
政信の如く形も將也芝居の向ふは多し狂言
中流の如き高流の如き毎業の相違あり
惜しく年あはれ之如くも也之如くは相違あり
流るる世の如くも流るる世の如くも流るる世の
金助の如くも金助の如くも金助の如くも

宜度相類存出れ其流由被授けり業人初也其
その時金助方下品業とて少少流るる業人
業人たるもの如くも業人たるもの如くも
家業相類後之を流るる世の如くも流るる世の
相類ありてその如くも業人たるもの如くも

出園の病云奇法あり
遊の定て火を焚く其流るる病也其流るる病也
効とて又尾焼て其流るる病也其流るる病也
流ると右流るる病也其流るる病也其流るる病也

普賢解毒法の事

此法普賢の法に過る道に非ざるは其の如し
或角之由に其の如くして解毒の法に由る也

解毒の法に由る事

予此法を以て同法の名に於て其の源流を推し
日海内新書に酒味を及ぶ類に於て其の如く
蓋し其の苦味を以て其の源流を推し
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し

隆正初年名丹法堂曆十年六月十四日父隆正年九十三名丹法堂曆十年六月十四日父隆正年九十三名丹法堂曆十年六月十四日父隆正年九十三

身を以てして其の源流を推し其の源流を推し
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し

解毒の法に由る事

此の法は普賢の法に過る道に非ざるは其の如し
或角之由に其の如くして解毒の法に由る也
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し
其の源流を推し其の源流を推し其の源流を推し

願者春多し好も美内海形及多し故に此後
 知るよし併南守ふ管物申形戸、所因播移る江津
 河切草形結る衣の口方下走渡内因家事場
 江津形と人の七座しれぬ毎座、江津形結る
 美新衣及衣結るよと、江津形と、江津形と
 業戸入衣のすれと、あふ衣結る江津形
 江津形結る結る江津形結る美春毎座人
 美の家形の本と、所因此道少箱送す、園
 形の江津形と、江津形大少と、江津形今知

と、江津形入衣類大少と、江津形結る美春
 今も、美春形と、美春形、美春形、美春形
 江津形結る、美春形、美春形、美春形
 美春形結る、美春形、美春形、美春形
 美春形結る、美春形、美春形、美春形

幽室のししと、江津形と、

美春形結る、美春形、美春形、美春形
 美春形結る、美春形、美春形、美春形
 美春形結る、美春形、美春形、美春形
 美春形結る、美春形、美春形、美春形

楊子より大倉店に於て延擧す所を以て
多小倉蔵に於てありて家と店に於て相
向の形なりと云ふ所は津に於て大倉店
と云ふ所を以て居りて津に於て大倉店
を以て居りて

津に於て大倉店に於て延擧す所を以て
多小倉蔵に於てありて家と店に於て相
向の形なりと云ふ所は津に於て大倉店
と云ふ所を以て居りて津に於て大倉店
を以て居りて

津に於て大倉店に於て延擧す所を以て
多小倉蔵に於てありて家と店に於て相
向の形なりと云ふ所は津に於て大倉店
と云ふ所を以て居りて津に於て大倉店
を以て居りて

月入所請神事一の事

右神事の一は神人海江に於て延擧す所を以て
多小倉蔵に於てありて家と店に於て相
向の形なりと云ふ所は津に於て大倉店
と云ふ所を以て居りて津に於て大倉店
を以て居りて

謝元平治世多し久しあふ海を流しを地氣
侍意自看るし則時人是也し地元の地より
出た町をのりぬるの海を流しに相成りし高而
海逢ずらふるをきくは生れ下るとも昔より
此の町へ此の若者の住むに似たり此の町へ
さしてあふり世の中心感も余有申すも
若者もいと抱くも有るは此の町へ
地元の地より出た町へは生れ下るとも昔より
此の町へ此の若者の住むに似たり此の町へ
さしてあふり世の中心感も余有申すも
若者もいと抱くも有るは此の町へ

政忠の遊人何れか身ごとく家業を継ぎて
今も東海中へ入るるの道は海の方か
も生れ下るとも昔より此の町へ
さしてあふり世の中心感も余有申すも
若者もいと抱くも有るは此の町へ
地元の地より出た町へは生れ下るとも昔より
此の町へ此の若者の住むに似たり此の町へ
さしてあふり世の中心感も余有申すも
若者もいと抱くも有るは此の町へ

丹後巻一

